



Title	懷徳堂の人々（三）懷徳堂の立地を支えた尼崎町界隈の町並み：その歴史地理学的アプローチ
Author(s)	矢内, 昭
Citation	懷徳. 1987, 56, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90677">https://hdl.handle.net/11094/90677</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 懷徳堂の立地を支えた尼崎町界隈の町並み

——その歴史地理学的アプローチ——

矢 内 昭

### はじめに

懷徳堂と適塾は、共に江戸後半期における大坂を代表する学問研さんの府であり、一方は官学、他方は私学、また一方は漢学の雄、他方は洋学の雄としてともに激変する時代的要請に応えてきた。世上屢々の文化不毛の地とする大坂評が聞かされるなかで、既に最も実利的な活力を展開していた江戸期の大坂において日本の誇りとも言うべき懷徳堂や適塾を生み育てた大坂町人の進取的な文化意識が垣間見えて面白く、また、くしくも懷徳堂の文化遺産は大阪大学文学部、適塾のそれは同医学部が継承し、同大学が大坂という歴史的都市が育んだ地域文化の継承と発展に寄与している姿がうかがえて心強い。

懷徳堂や適塾の創立とその学風、および社会的役割と

その評価などについては、既に研究し尽された感があり、今さら取りあげる余地もないと考えられるので、本稿は、特に懷徳堂に関し、今まであまり実証的には追跡されてこなかった側面、つまり懷徳堂の経営基盤や学風形成ともかわり、多くの町人学者や文化人を輩出した豪商の屋敷立地を課題化し、筆者が先に「適塾立地の歴史地理的背景」(「適塾」十五号 昭和五七年)と題して試みた手法、即ち水帳記載の地図化とその経年的分析によって解明してみたい。

### 一、懷徳堂創立の経過と尼崎町界隈

享保九年(一七二四)の妙智焼で、正徳三年(一七一三)に安土町二丁目北側界筋西入る表口四間、奥行二〇間の屋敷に創建された後、当時高麗橋三丁目学屋三郎右

衛門借家に立地していた三宅石庵(寛文五〇享保十五年)主宰の講舎多松堂も焼失した。そこで同年、これまで石庵の学識に心酔し後援した道明寺屋吉左衛門(富永芳春、歿年不明)・三星屋武右衛門(中村良斎、享保十七年歿)・備前屋吉兵衛(吉田可久、明和四年歿)・舟橋屋四郎右衛門(長崎克之、生歿年不明)・鴻池屋又四郎(山中宗古、宝暦四年歿)等五同志が中心となり、尼崎町一丁目の道明寺屋吉左衛門隠居屋敷(表口六間半 奥行二〇間)の無償提供をうけて「吾党の学問所」としての講舎再建となり、平野郷含翠堂に避難中の石庵の帰坂を求めて講舎も新しく懷徳堂と命名し開学した。

ところが、学問好きといわれた当時の為政者將軍吉宗の文教政策と懷徳堂経営基盤の永続的安定を願う五同志の意図が結合し、中井翫庵(元禄六〇宝暦八年)による対幕閣接衝奔走も奏効して享保十一年(一七二六)には東隣尼崎屋市右衛門(金崎高直)の焼跡明屋敷を併わせた表口十一間半裏行二〇間の屋敷を改めて拝領し、三宅石庵を初代学主、中井翫庵を預り人とする幕府公許の「学校」(通称学問所)として開学されることとなった。ここにおいて去る元禄三年(一六九〇)將軍綱吉により幕臣教学の府としての昌平坂学問所開学から遅れる

こと三十七年にして漸く天下の台所とも言うべき大坂においてもその町人教化の官学聖堂設立が実現したわけであるが、その拝領屋敷が元来負担していた三役の町役免除の扱いも、実際は道頓堀吉左衛門と九郎右衛門両町がその裏尻買添地の新建家免許とひきかえに代替負担している(「水帳」享保十一年奥書)。

また懷徳堂の運営経費は五同志その他有力町人の相談衆による義援金で賄われているなどあくまで町人主導型で経営されている点その特色がうかがえる。

尼崎町一・二丁目水帳を経年的に整理した屋敷創図(図1)の享保十一年図は、この学問所開設直前の店並みを表わしており、屋敷地の提供者である造り醬油屋の道明寺屋吉左衛門・尼崎屋市右衛門両家の尼崎町一丁目における立地が確認でき、また、五同志の一人でありかつ懷徳堂経営の有力な資金の後援者となった両替商鴻池屋又四郎家(初代宗古は、本家二代宗利の子)は同二丁目北側に表口二二間半奥行二〇間大店を構えているが、又四郎没後の同家は漸次斜陽化し、安永七年図以降ではその屋敷が本家善右衛門家の所有に移っている。なお、五同志の一人道明寺屋吉左衛門家の醬油店は懷徳堂の筋向い表口十間奥行二〇間の大店を構え、芳春・仲基父子

とも懷徳堂経営に参画し、ことに仲基（正徳五→延享三年）は懷徳堂が生んだ天才と評される町人学者で、彼の仏学論説はその著作『出定後語』（延享二年）に結実された。この富永家一門も寛政十年（一七九八）図では既に姿を消している。

また、寛保三年（一七四三）以来学内に起居した五井蘭洲の主唱により此の頃から尼崎町に限り無縁の人でも聴講を許して地元との親密な関係取り結びがはかられた模様で、安永七年の同町屋敷割図では懷徳堂東四軒目にその屋敷が記されている当時の町年寄川井立斎（医師）の聴講も許され、彼は漢詩・和歌の素養もあって蘭洲門下の和学者として知られる様になり『日本紀瑣言』『古今和歌通』などの著作を残している。

ところで延宝七年（一六七九）一・二丁目分割以前の尼崎町の起立は明らかでないが、その開発町人と目される尼崎屋一党のうち造り醬油屋を営んだ市右衛門家は、尼崎一丁目の持屋敷を懷徳堂用地に提供した後、北接の梶木町に本拠を移したらしく、梶木町屋敷割図（図2）の寛政十年図には表口一九間奥行二〇間の大店を構え、その一族七右衛門家も表口一〇間余の二屋敷を持つ大店として記されている。両家は「懷徳堂定約附記」（宝曆

八年）に五同志の家筋と共に連署しており、また中井竹山（享保十五→文化一年）が四代学主に就任した天明二年（一七八二）の「相談党」記載の八人衆にも鴻池屋惣太郎（又四郎家三代宗通）、播磨屋九郎兵衛（梶木町の寛政・安政両図に表口五間余の屋敷記載）と共に加わり、『懷徳堂内事記』には「なかならず両尼崎屋は、諸事引き受けの世話を致され候」とあって懷徳堂の経営に深くかかわってきた家筋であるが、安政三年（一八五六）図では七右衛門家は既になく、吉右衛門家のみが表口三間半の小店として残存していることがわかる。

## 二、懷徳堂のその後を支えた町人学者の店分布

懷徳堂も草創期の三宅石庵・中井髻庵コンビの時代を終え、やがて中井竹山・履軒（享保十五→文化十四年）兄弟による経営の時期を迎える。共に先代中井髻庵の学友で石庵なき後は懷徳堂教学に恵念した五井蘭洲（元禄十→宝暦十三年）の薫陶を受けた逸材で、儒家として大成し、その名声を博したが、ことに竹山は懷徳堂の経営面で敏腕を振うと共に、寛政元年（一七八九）には『草茅危言』（全十巻）を著して時の老中松平定信に献ずる

1

[illegible]

図 2 梶木町の屋敷割図一寛政10年・安政3年一

<p>寛政十年</p> <p>加島屋作兵工</p> <p>同左</p> <p>加島屋市兵工</p> <p>池屋 武助</p>	<p>肥前屋</p> <p>八郎兵衛</p> <p>天満屋鐵太郎</p> <p>西 尊光寺</p> <p>萬壽堂玄右工門</p> <p>至孝屋治五門</p> <p>天至孝屋虎左</p> <p>会所</p> <p>權左屋松兵工</p> <p>七右衛門</p> <p>尼崎屋 平右衛門</p> <p>鴻池屋</p> <p>平右衛門</p> <p>尼崎屋</p> <p>平右衛門</p> <p>尼崎屋</p> <p>天至孝屋</p> <p>沐浴兵工</p> <p>煙草屋文左門</p>	<p>安政三年</p> <p>紙屋 甚右工門</p> <p>榎屋仁平</p> <p>全草屋</p> <p>宗十郎</p> <p>屋敷屋常吉</p> <p>河内屋</p> <p>清助</p>
<p>加島屋</p> <p>同左</p> <p>同左</p> <p>勝之助</p> <p>加島屋</p>	<p>肥前屋</p> <p>八郎兵衛</p> <p>加島屋市</p> <p>西 尊光寺</p> <p>牛屋七兵工</p> <p>至孝屋松兵</p> <p>天至孝屋虎左</p> <p>会所</p> <p>權左屋松兵工</p> <p>七右衛門</p> <p>紙屋</p> <p>甚右之助</p> <p>堀屋</p>	<p>紙屋</p> <p>甚右工門</p> <p>榎屋仁平</p> <p>全草屋</p> <p>宗十郎</p> <p>屋敷屋常吉</p> <p>河内屋</p> <p>清助</p>
<p>加島屋</p> <p>同左</p> <p>同左</p> <p>勝之助</p> <p>加島屋</p>	<p>肥前屋</p> <p>八郎兵衛</p> <p>加島屋市</p> <p>西 尊光寺</p> <p>牛屋七兵工</p> <p>至孝屋松兵</p> <p>天至孝屋虎左</p> <p>会所</p> <p>權左屋松兵工</p> <p>七右衛門</p> <p>紙屋</p> <p>甚右之助</p> <p>堀屋</p>	<p>紙屋</p> <p>甚右工門</p> <p>榎屋仁平</p> <p>全草屋</p> <p>宗十郎</p> <p>屋敷屋常吉</p> <p>河内屋</p> <p>清助</p>
<p>加島屋</p> <p>同左</p> <p>同左</p> <p>勝之助</p> <p>加島屋</p>	<p>肥前屋</p> <p>八郎兵衛</p> <p>加島屋市</p> <p>西 尊光寺</p> <p>牛屋七兵工</p> <p>至孝屋松兵</p> <p>天至孝屋虎左</p> <p>会所</p> <p>權左屋松兵工</p> <p>七右衛門</p> <p>紙屋</p> <p>甚右之助</p> <p>堀屋</p>	<p>紙屋</p> <p>甚右工門</p> <p>榎屋仁平</p> <p>全草屋</p> <p>宗十郎</p> <p>屋敷屋常吉</p> <p>河内屋</p> <p>清助</p>



など政治向の提言も行い、また寛政四年の大火で類焼した講舎の再建に当ってはこの機に敷地を拡大して名実ともに官学として強化された懷徳堂の再興に奔走するなど巾の広い行動を展開し、父贅庵の経営の才を継承している。

また、五井蘭洲なき後の懷徳堂教学は三代学主三宅春楼が病身のため消極化し、かつ彼の朱陸一致説が批判的にされるなど一時その学政も乱れたが、天明二年（一七八二）竹山が四代学主に就いて以来一変して世上その学風を「ぬえ学問」と評され、またその権力すりより型の姿勢に悪評がたつなどの批判をうけながらも、既に私塾水哉館を主宰し、常に孤高的な学究態度を守った履軒の協力もあって再び自由闊達な学風をとりもどし、利の正当性に立脚し、近代科学への関心にまでひろがる懷徳堂学派の文運隆昌をもたらした。そしてこの時期にはその講筵に連なる多くの町人学者も輩出し、まさに大坂和学の黄金期を画した感がある。

なかでも享和二年（一八〇二）に『夢の代』（全十二巻）を著してその革新的な学識を集約した升屋小右衛門（山片蟠桃、寛延元々文政四年）と、文化十二年（一八

一五）の『三貨図彙』（全四冊）や『草間伊助筆記』（全六巻）など多くの大著を残した鴻池屋伊助（草間直方、宝暦三々天保二年）はその双壁といえよう。

升屋は米仲買五軒仲間の内に加わる米方両替で、天明四年（一七八四）の大火以来堂島中一丁目から梶木町に移って開店した。寛政・安政両年度の同町屋敷割図にはその表口十九間余の本店が記されており、また升屋小右衛門は安永元年（一七七二）に升平の店支配就任以来四代当主平右衛門重芳（延享三々天保七年）を助けて経営の才を振い、親類並の別家として升平店東二軒目の表口六間半の屋敷（升屋小三郎名義）を居宅としていたことがわかる。また、丁稚時代の彼を育てた二代当主平右衛門重賢（宝永三々明和六年）もなかなかの聞人として知られたという。鴻池屋は今橋二丁目に本拠をおいた十人両替の善右衛門家に勤めた大番頭で、後には別家の伊助家を相続し、文化六年（一八〇九）以来今橋二丁目の中橋筋西北角に表口六間半の店屋敷と十五間の掛屋敷をもつ本両替の本店を構えていたことが安政三年の同町図からも確認でき、また安永七年の尼崎町一丁目屋敷割図には淀屋橋筋に面した角地に彼が入婿した伊助家の表口八間半の店屋敷が記されている。



なお、蘭洲門下の住友分家泉屋理兵衛（入江友俊、享保三ノ寛政十二年）は豊後町で本兩替を営む豪商で、和学の大家僧契沖の学風に私淑した好学の士として知られるが、その懷德堂経営との直接的なかわりには不明である。また同町の小川屋喜太郎（加藤友輔）は折屋町で表口十九間、奥行十三間の大店を構えた（安政三年同町水帳）薬種商であるが、歌人学者としても知られ、天明二年の相談八人衆にも加わっている。

ところで、かつての五同志・八人衆なき後の懷德堂経営を資金的に後援した有力町人名やその所在については、懷德堂文庫所蔵の古文書精査の機会を得ないままの起稿となってしまうのでそのすべてを明らかに出来ないが、天明年間の『懷德堂義金簿』には升屋平右衛門が登場し、寛政八年（一七九八）の懷德堂再建も升屋平右衛門の肩入れが貢献したという。同九年の中井蕉園預り人相続に際し、翌十年実施された経営安定基金の応募は不振であったというが、升平・鴻伊の応分の後援を得たものと推定され、天明以来の懷德堂経費は升屋・千草屋・尼崎屋によって運用されていた。天保四年（一八三三）の修復予備義金の応募者は六六名でその内に山片平朔（四代重芳）・山片平右衛門（五代重信）・山片七兵衛・

山片小右衛門（芳達）・山片小三郎の五名が加わり、学問自慢を旨とする升屋の面目躍如たるものがある。同義金には山中善右衛門・草間伊助・鴻池治助・山中鶴之助（又四郎家七代）等鴻池一統も加わっているが、升屋ほどその経営に密着しなかった模様である。なお、懷德堂は安政六年（一八五九）にも「永統助成銀」の無利子借入を募ったが、千草屋（平瀬）宗十郎・同市郎兵衛、炭屋（白川）彦五郎がその筆頭に登場している。千草屋は播州実栗郡千草郷の鉄商として産をなし、元禄年間に上坂した新興の兩替屋で、寛政・安政兩年度の梶木町図では既にその淀屋橋筋西南角に表口十四間半の大店を構えており、また同町の尼崎屋市右衛門家衰微に際し、その店の大半表口十五間半を掛屋敷として継承したことが記されている。また文化・安政兩年度の尼崎町一丁目屋敷割図には懷德堂東隣にも表口十六間に及ぶ千草屋の扣家抱屋敷が記されなかなかの資産家として成功していたことがわかる。その七代亀之助（平瀬露香、天保十ノ明治四十一年）は、かつての木村兼葭堂（元文一ノ享和二年）の再現かとも評された博学多才の聞人で、懷德堂経営の最後を切り盛りした町人学者でもある。なお、千宗と共にこの期の懷德堂経営に助力した千草屋市郎兵衛は

尼崎町二丁目に表口六間・五間半の二屋敷（安政三年水帳）をもつ資産家であり、炭屋彦五郎は天明八年（一七八八）に開店した両替商で、十人両替ともなり、安政三年の平野町一丁目水帳には表口六間六尺奥行二十間半の店とを東隣に表口六間の掛屋敷をもつ大店として記され、この屋敷は現存している。

### 三、大坂の学芸を支えた北脇長者町的環境

大川沿いの北浜から今橋通りを経て京街道筋の高麗橋通りに至る界限は北脇と呼ばれ、屢々北筋辺のよい衆はと評される諸事格別の長者町となっていたことはよく知られ、享保十一年以来の懷徳堂（尼崎町一丁目）、天保三年以来の梅花社（同二丁目）、同十四年以来の適塾（過書町）、安政元年以来の九桂草堂（伏見町）など、それぞれ当時の大坂を代表した講舎の多くがこの界限に育ち、船場の文教街ともいふべき町柄を形成していた。北脇北端の北浜通りは船場表の浜の町で、過書船と渡海結節の船着き場として賑わった。

長崎貿易と深くかわった北浜一丁目の俵物会所や過書町の銅座役所も立地して大坂における内外情報センターの役割を担い、その南裏の今橋通りはその一丁目に

「天五」と「平五」、二丁目に「鴻善」「鴻篤」「鴻庄」「鴻伊」など鴻池一党が立地する本両替の町を形成し、その両替店は西隣りの尼崎町一丁目の「鴻猶」「鴻市」の outlet に波及しているが、同町の「加島作」、二丁目の「米伊」、梶木町の「升平」は何れも堂島米市に近い地の利を生かして出店した米仲買店で、東の本両替、西の米方両替に代表される今橋通りとその界限は、大坂商内を動かす巨大な金融街を形成していたといえよう。この通りにはまたその一・二丁目に堺屋・紙屋兩統による江戸積紙問屋が立地し、その南側の高麗橋通りには一丁目に岩城升屋・三井越後屋に代表される現銀正札の呉服太物店、二・三丁目に信州取引の芋麻問屋が集中し、また北浜二丁目から過書町にかけては法華庄次郎をはじめとする三塩問屋、梶木町には尼崎屋・天川屋などの造り醬油屋が店を構えるなど大坂を天下の台所たらしめた船場の且那衆の働き場としてその大店が軒を連ねる町並みを形成するとともにまた且那衆の蓄財として投資した多くの扣家抱屋敷の並ぶ町並みでもあった。

北脇の西部が当時の大坂の文教街的な様相をみせた背景としては、北浜が果していた内外情報センター的機能と、船場の且那衆が正路の商内に精を出して蓄財した後

は家業を譲って仕舞屋に隠居し、分相応の諸芸を修め粹人・聞人としての余生を楽しむことを理想とする風潮があり、長者町といわれる北脇には多くの隠居屋敷が分布して大坂の学芸を支えた一種の文化サロンの環境が醸成されていたことにもよるといえよう。

参考文献

- 宮本又次「大阪の研究」(全五巻) 清文堂出版 昭42~45  
 宮本又次「上方の研究」(全五巻) 清文堂出版 昭47~52  
 宮本又次「大阪文化史論」 文献出版 昭54  
 「懷徳堂の過去と現在」 懷徳堂記念会 昭54  
 宮本又次「大阪経済文化史談義」 文献出版 昭55  
 大阪大学放送講座「大阪の学問」 大阪大学 昭55

- 宮本又次「町人社会の人間群像」 ベリかん社 昭57  
 宮内徳雄「山片蟠桃」 創元社 昭95  
 藤本 篤「なにわ人物譜」 清文堂出版 昭59  
 肥田皓三「上方風雅信」 人文書院 昭61  
 脇田 修「近世大坂の町と人」 人文書院 昭61

資料化した尼崎・梶木両町の水帳は大阪市立中央図書館・大阪大学経済学部所蔵のものを使用し、ことに後者の活用については作道洋太郎教授ならびに懷徳堂記念会事務局の厚意によるものであることを申し添え改めて感謝する次第である。

(大阪府立清水谷高等学校教諭・大阪外国語大学非常勤講師)